高雄県旗山鎮の街屋平面プランについて

台湾における山間地域の街屋に関する研究 その2

STUDY ON THE PLANS OF TOWN HOUSES IN CHI-SHAN KAOHSIUNG HSIEN

—Study on the town houses of mountainous region in Taiwan, Part 2—

聶 志高**, 玉置伸悟*

Chihkao NIEH and Shingo TAMAKI

This paper aims to clarify the planning characteristics of the town houses in the mountainous regions in Taiwan by adducing Chi-Shan Chen, Kaohsiung Hsien as examples.

Main conclusions are as follows:

1. The original dwelling plan of the town houses in this region could be classified into two plan types by the pattern of composition of shop space and Dai-cho (Main living room).
2. In the process of the enlargement and the rebuilding of the town-house, the functions of Dai-cho have been separated and the number of the rooms on the 2nd floor have been increasing, and the sanitary fittings have been placed inside of the house.
3. Recently, five-storey town houses have turned to be a majority.

Keyword: Chi-Shan Chen, Ho-Yuan town houses, Town house in Western-style,

Tou-Tien-Chu

旗山鎮、合院式街屋、洋風街屋、透天厝

1. はじめに

これまでの台湾における街屋研究の大半は漢民族の移民により開発された19世紀初期の港町や大都市内の街屋を対象としてきた。その点は前報¹⁾で指摘した。一方、台湾を全島の視点から見た場合、山間部は沿海部や大都市部と比較して、その歴史や文化、風土性において多くの「地域性」が存在している。その「地域性」を反映して山間部の街屋住宅においてもその規模や住宅の平面形式、居住形態などに相違が見られる。その「地域性」の背景には、気候風土という自然的要素、開発過程という歴史的要素、またそれにより規定される生産形態、家族形態という社会（経済）的要素が大きく関係している。

それ故、山間地域街屋を考察するためには、台湾の場合、地理的条件の相異が歴史的、文化的、経済的状況にも大きく反映している北部、中部、南部の山間地域における街屋地区を抽出し、検討する必要がある。その対象

の一つとして、ほぼ同時期（1800年代）に、同じ閩南系移民により本格的な開拓が行われた山間地域として台北県深坑郷（福建省泉州移民）と高雄県旗山鎮（福建省汀州移民）がある。同じ文化的背景をもつ移民が同時代に異なった地域に移住して、その住空間を規定する「地域条件」、すなわち風土、歴史、社会、産業という状況に応じていかに住空間形式を展開してきたのか、また、発展段階や居住ニーズに対応して、住空間の規模や平面形式をどのように変化させてきたのか、すなわち前報と同様に街屋の成立背景、敷地状態、平面構成及び増改築過程について分析する一方で両地方の比較分析を行うことを目的としている。

さらにまた、ほぼ同時期（1790年代）に移民したもう一つの集団として、同じ漢民族ではあるが異なる文化的背景を持つ客家系移民（広東省、福建省汀州）がある。客家系移民は台湾への移住の後進性から山間地域に多く分布している。それ故、山間地域の街屋を体系的に把握

* 福井大学工学部環境設計工学科 教授・工博

** 福井大学大学院工学研究科 博士後期課程
修士(芸術)

Prof., Dept. of Architecture and Civil Engineering, Faculty of Engineering, Univ. of Fukui, Dr. Eng.
Dept. of Architecture and Civil Engineering, Faculty of Engineering, Univ. of Fukui, Mr. Design

〔図1〕旗山鎮の位置

〔図2〕旗山鎮の開発進行方向

〔図3〕延平路南端の街屋地籍図及び復元図

するためには、この客家系街屋についての調査、分析も必要であるが、それは他報に委ねることとする。

2. 調査概要

旗山鎮は高雄県の東北に位置し、台湾の南北に繋がる中央山脈の西南部の山間盆地である（図1）。地形は東、北、西の三面を山岳で囲まれており、西南側から東北側へ次第に細長くなり、楠梓仙溪が盆地の中央部を横断している。

最初の開拓は18世紀初頭（清康熙末期）の福建省汀州移民により始まり、19世紀初期までに南北方向に長さ約200mの商店街（当時「太平街」と呼ばれ、現在の「延平路」の南端）に発展した。1895（明治28）年、日治時代の始まった頃の住宅戸数は約300戸、人口約千人の小規模な山間町であった²⁾。

19世紀中期から欧米商人は台湾で茶、砂糖、樟脳を生産し、それを輸出していた。その中でも砂糖黍の栽培は台湾の風土に適しており、また高い経済性を有する農作物であるため、日治時代初期の植民地政府はそれを優先奨励した。1902年、「台湾製糖奨励規則」が公布され、1910～1930年の間には砂糖は台湾の総輸出量の5～6割を占めるまでになった³⁾。この農業政策は旗山鎮の産業形態にも大きな影響を及ぼした。旗山鎮は日治時代初期において、米、バナナ、砂糖黍、樟脳の生産を中心とした農産地帯であったが、植民地政府の砂糖生産の推進策により、砂糖黍畑が広げられ、また「台湾製糖株式会社」が経営する「旗山製糖廠」や「軽便鉄道」が建設された。「軽便鉄道」は原料の運搬の他に旅客、貨物の輸送にも大いに利用された。そして、次第に駅の周辺は山間地域の商業圏が形成されるようになる。その駅及び郡役所が位置する「旗山街」は、周辺の農村からの農産物を集め、台南、高雄の両大都市に送り出す役割を果たしていた。また、両都市からの仕入れを農家に供給する拠点でもあり、郡内の唯一の商業地区となった。しかし、戦後、製糖産業が衰退したのに伴い「軽便鉄道」が廃止さ

れ、現在では幹線道路のみで大都市と繋がっている。1953から1971年にはバナナの栽培とその日本への輸出により活気が生まれたが、この地域の消費圏は依然として、農家及び地域内の人々を主な客とする地方的性格の強い商業形態である。

一方、旗山鎮の行政沿革については、1897（明治30）年、旗山鎮における最初の行政機関である「撫墾署」が設置され、1901（明治34）年末に制度改正により「蕃薯寮庁」となった。その後1921（大正10）年、旗山街、美濃庄、杉林庄、内門庄、甲仙庄、田寮庄を管轄する「旗山郡」となった。戦後は「旗山鎮」と称している。

その経過の中で1901年、「蕃薯寮庁」の初代庁長である石橋亨は大規模な「市区改正」を実施した。それまでの旗山鎮の主要道路は南北方向に延びる1本だけであったが、それに加えて南北方向（中山路）と東西方向（現在の仁和路、平和路、華中路、永福街、永安街）の計7本の主要道路が建設され、格子状の道路網となった。これが今日の旗山鎮中心市街地の基盤となっている（図2）。

道路整備の実施に伴い、大量の街屋住宅が建設された。これは市街地の居住を促し市街地の活性化を図るための施策でもあった⁴⁾。事実、1920（大正9）年の国勢調査をみると、郡役所所在地である旗山街の人口数は4459人となっており、日治時代の始まった1895年頃の4.5倍、さらに、1935（昭和10）年の国勢調査では、7959人となり、1920年に比べて3202人の増加、1.8倍になっている。以上からも旗山鎮の開発が果たした役割の大きさが窺える。このように旗山鎮は相当早い時期（1901年）から都市計画を行っており、その点において深坑郷と異なっている。その差異がその後の住宅の発展にどのような影響を及ぼしているかをみるのも本研究の目的の一つである。

旗山鎮において現在もなお残存している日治時代の街屋住宅の多くは石橋亨により建設されたものである⁵⁾。この時期に建てられた街屋は台湾の伝統的街屋形式を取

〔表1〕19世紀中期～末期、延平路南端の街屋敷地間口別に敷地奥行の集計表

奥行	10m未満	10～20m	20～22m	22～24m	24～26m	26～28m	28～30m	30～32m	32～34m	34～36m	36～38m	38～40m	40～42m	42m未満	合計
3.6m未満	2	2.0%												2	3.9%
3.6～															-
3.9m未満				2											2
3.9～															3.9%
4.2m未満															1
4.2～															2.0%
4.5m未満															12
4.5～			2	1	1				1					2	23.5%
4.8m未満			3.9%	2.0%	2.0%		7.8%	2.0%			2.0%			3.9%	11
4.8～	1									2					21.8%
5.1m未満	2.0%			5.9%			3.9%		3.9%		5.9%				7
5.1～	1				2			1				1		2	13.7%
5.4m未満	2.0%				3.9%			2.0%				2.0%		3.9%	1
5.4～															2.0%
5.7m未満							2.0%								1
5.7～															2.0%
6.0m未満															2
6.0～															3.9%
6.3m未満				2.0%						2.0%					-
6.3～															1
6.6m未満								2.0%							2.0%
6.6～															2.0%
7.2m未満															2.0%
7.2～															2.0%
7.5m未満															2.0%
7.5m以上				1	1		3	2						1	10
合計	3	2	2.0%	2.0%		5.9%	3.9%	2	3	-	4	1		2	51
	5.9%	3.9%	15.7%	7.8%	-	23.5%	7.8%	3.9%	6.0%	-	7.8%	2.0%	-	11.8%	100.0%

り入れながら、一方で都市化に対応する新たな形式が用いられた。その街屋形式は街屋住宅の変遷過程を考察する上で豊富な内容を提供している。また、ほぼ同時期に自然形成された深坑街屋に対して、画一化された旗山街屋は台湾において最も早く都市住宅の試みが行われた地域として対照的である⁶⁾。それ故、南部の山間部の調査対象として旗山鎮を選定した。

第1次現地調査は1994年8月7日～9月3日に実施し、主に日治時代（1895～1945年）に建設されたと思われる42軒（36軒の街屋住宅と6軒の合院式街屋住宅）の街屋プランを採集した。第2次現地調査は、1995年3月12日～23日に行い、主に最近10年間に建設された90軒の現代風の街屋プラン（「透天厝」、あるいは「透天店舗住宅」と呼ばれる）を採集した。

調査においては、街屋住宅の平面、立面の実測及び家族構成、住まい方、建築年代、増改築年代とその内容についてのヒアリングを行った。

3. 旗山鎮の街屋敷地

旗山鎮において最初（18世紀初期）に開発された地域は現在の延平路の南端であった（図3、左側）。しかし、現在、旗山鎮の中心部となった延平路はその後の都

市計画及び建築活動によりその敷地は次第に細分化され、原初状況はほとんど維持されていない。また、この地域の原初的な街屋住宅も全て新たに現代風の街屋住宅に建て替えられている。また、当時の平面プランも残っていないため、旗山鎮における最も原初的な街屋プランは不明である。

しかし、日治時代初期に作成された地籍図及び1962年に修正された地籍図がある。これにより日治時代初期まで遡って敷地状況の変化を見ることができ、敷地の形状や宅地の細分化の過程を把握することができる。そこで、さらに清末から日治時代初期までの敷地状況を説明するために、1962年に修正された地籍図を基に、既報で示したのと同様の原則に基づき、最も古い街屋が存在していた延平路南端の道路沿いの街屋敷地を復元した（図3、右側）。その結果を敷地間口別に敷地奥行を集計したのが表1である。

その結果、延平路南端の街屋敷地間口は4.5m台（2.5間）と4.8m台（2.7間）が最も多く、この地区の約5割近くを占めている。平均値は5.3m（2.9間）である。比較的に広い間口7.5m台（4.2間）以上も約2割ある。さらに、この地区の南端と北端の敷地では、間口20m～40mと非常に大きな間口を持つ宅地（5軒）が見られる。これは旧市街

〔表2〕19世紀末期、中山路北端の街屋敷地間口別に敷地奥行の集計表

奥行	10m未満	10～12m	12～14m	14～16m	16～18m	18～20m	20～22m	22～24m	24～26m	26～28m	28～30m	30～32m	32～34m	34～36m	36～38m	38～40m	40～42m	42～44m	44m未満	合計
4.2～	1																			1
4.5m未満																				1.2%
4.5～																				1.2%
4.8m未満	1.2%	1.2%				2.5%	3.7%	1.2%	1.2%	1.2%					1.2%	2.5%		1.2%		17.3%
4.8～	1	1				2	2	1	1	3					2	6				20
5.1m未満	1.2%	1.2%				2.5%	2.5%	1.2%	1.2%	3.7%					2.5%	7.4%	1.2%			24.7%
5.1～	1	1				1	2	1	5		1	1	2	3	8	2	5			29
5.4m未満	1.2%					1.2%		2.5%	8.2%		1.2%	1.2%	2.5%	3.7%	7.4%	2.5%	8.2%			35.8%
5.4～																				2
5.7m未満																				2.5%
5.7m以上																				10
合計	3	2	1	6	0	5	8	5	8	5	2	1	4	7	18	5	7	2	2	81
	3.7%	2.5%	1.2%	8.2%	11.1%	6.2%	9.9%	6.2%	9.9%	6.2%	2.5%	1.2%	4.9%	8.6%	18.5%	8.2%	8.6%	2.5%	2.5%	100.0%

地の周辺に分布する田圃及び農家の宅地と思われる。

敷地奥行を見ると、最小14m～最大55m台と格差が大きい。その中で28m台(15.5間)が最も多く、次に、22m台(12.2間)、50m台(27.7間)と続く。また、奥行が50m～54mにも及ぶ敷地も8軒見られ、旗山鎮の街屋の中で最も奥深い敷地である。奥行の中央値は34m(18.8間)であり、平均値は31m(17.2間)である。

旗山鎮の開発は現在の延平路南端に始まり、次第に北部(中山路の北端)に広がっていった。その北部のほとんどは、元来市街地の外環に位置する田圃であったが、市街地の開発につれ細分化され、19世紀末期には街屋地区に変容した。この北部地区街屋敷地の間口は5.1m台(2.8間)が最も多い。以下、4.8m台(2.7間)、4.5m台(2.5間)と続く。これらの3つを合わせる4.5m～5.1m台でこの地区の街屋全体の77.8%を占めている。間口の平均値は4.9m(2.7間)である。延平路南端と同様、間口規模は4.5m、4.8m、5.1m台が主流である(表2)。

敷地奥行もまた同様に格差が大きい。38m台(21.1間)が最も多い。ついで20m台(11.1間)～28m台(15.5間)と34m台(18.8間)～42m台(23.3間)が主な分布範囲となっている。奥行の中央値は26m(14.4間)台、平均値は30.7m(17.1間)であり、延平路南端の平均値(31m)と差がない。

一方、その次の時期に開発される、つまり1901年の市区改正に伴い、石橋亭の手によって建設された街屋の大半は旧旗山駅の北側に密集している。これらの街屋は比

較的均一な規模で建設された。敷地の規模は小さく、間口の分布は5.1m台(2.8間)を最大に、次に4.8m台(2.7間)と続く。4.8mと5.1mで全体の約7割を占めている(表3)。平均値は4.9m(2.7間)である。

敷地奥行については、16m台(8.8間)、14m台(7.7間)20m台(11.1間)が多く、これらで全体の7割を占めている。さらに分布範囲を広げて、18m台(10間)と12m台(6.6間)を入れると、12m～20mで全体の9割以上に及ぶ。敷地奥行の中央値は16m(8.8間)、平均値は16.2m(9間)であり、前時期の街屋に比べて半分程の浅さとなる。

その次の大正中期から昭和初期にかけては、中山路の中央部の道路沿い(「天后宮媽祖廟」の裏側)に一連の2階建ての赤煉瓦造の街屋が建設された。これらの街屋は同一の平面プランが用いられ、敷地も間口は4.5m台(2.5間)、奥行は29m(16.1間)と均等に区画された。

日治時代の終焉後、細分化された中心市街地では増改築と建て替えが進み、また、敷地の合筆も見られる。

近年では、市街地周辺において街屋が著しく増加し、住居併用商業地が大幅に拡張していることが第2次調査により確認できた。旗山鎮において、最近10年間に建設された現代風の街屋住宅のほとんどは透天店舗住宅(透天厝)であり、類似の平面を持つ街屋が大量に建設されている。敷地間口についてみると、4.2m台(2.3間)が最も多く、次に3.6m台(2間)であり、両者を合わせると、現代風の街屋住宅全体の72.2%に及んでいる。平均値は4.3m(2.4間)である。間口方向は日治時代までの街屋より狭くなっている。敷地奥行に関しては、14m台(7.7間)の44.4%(40軒)を最大に、次に16m台(8.8間)と12m台(6.6間)である。この12～16m台で現代風街屋住宅全体の9割以上を占めている。奥行の平均値は14m(7.8間)であり、最も奥行の浅い敷地となっている(表4)。

以上の旗山鎮の街屋住宅における敷地規模を時代別にまとめると以下ようになる。

19世紀中期から19世紀末期までに開発された延平路南端及び中山路北端の街屋敷地間口の平均値は5.3m(2.9間)、敷地奥行の平均値は31m(17.2間)である。

1900年代頃に開発された旧旗山駅北側の街屋敷地間口は平均4.9m(2.7間)、奥行は平均16.2m(9間)である。19世紀中期～末期の街屋敷地に比べて、市区改正後の計画的開発の結果、間口で0.4m狭まり、奥行は半分近く浅くなった。

次の20世紀初期～中期(大正中期から昭和期)の経済発

〔表3〕20世紀初期、旧旗山駅周辺の街屋敷地間口別に敷地奥行の集計表

奥行	12m	12～14m	14～16m	16～18m	18～20m	20～22m	22～24m	24～26m	26～28m	合計
3.0m			1.95	2.95						4.90
3.6m	1.95			6.15						8.10
4.2m			1.95	2.95						4.90
4.8m			1.95	3.95	2.95	2.95				10.80
5.4m	1.95		2.95	1.95		1.95				6.80
6.0m					2.95	1.95				4.90
6.6m			0.95	11.95	2.95	1.95				17.80
7.2m	1.95	10.15	5.15	7.95	0.95	11.95	1.95	2.95		45.00
7.8m				1.95						1.95
8.4m										
合計	3.90	10.15	10.05	36.05	11.05	10.05	1.95	2.95	100.05	

〔表4〕現代風街屋(透天式)の敷地間口別に敷地奥行の集計表

奥行	12m	12～14m	14～16m	16～18m	18～20m	20～22m	22～24m	24～26m	合計
3.0m			1.15	20.75					21.90
3.6m	7.95								7.95
4.2m			9.95		9.95				20.90
4.8m	1.15		40.95		3.95				46.05
5.4m	1.15		2.95	2.95					7.05
6.0m			1.15						1.15
6.6m									
7.2m	3.95								3.95
7.8m		9.95			1.15				11.05
合計	11.10	9.95	54.05	24.95	14.95				115.00

〔表5〕旗山鎮と深坑郷の街屋敷地規模の平均値

時代別	旗 山 鎮		深 坑 郷	
	間口	奥行	間口	奥行
19世紀中期～末期	5.2m(2.9間)	30.1m(17間)	-	-
20世紀初期	4.9m(2.7間)	16.2m(9間)	3.6m(2.0間)	24.3m(14間)
20世紀初期～中期	4.5m(2.5間)	10.0m(10間)	3.6m(2.0間)	14.2m(8間)
20世紀中期～現在	4.3m(2.4間)	14.1m(8間)	3.5m(2.5間)	30.0m(17間)

展を背景として建設された中山路中央部の一連の2階建て街屋住宅は敷地間口が4.5m(2.5間)、敷地奥行29m(16.1間)の画一的規模で区画される。1900年代初期よりさらに間口は狭くなる。

近年の現代風街屋の敷地間口は平均4.3m(2.4間)、敷地奥行は平均14.1m(7.8間)となった。最も初期段階の街屋と比べると、間口は約1m減小、奥行は約半分に浅くなってきている(表5)。

ところで、前稿の深坑街の街屋敷地は、19世紀末期～20世紀初期(清時代末期から大正中期)まで、敷地間口は平均4.6m(2.6間)であり、敷地奥行は平均24.3m(13.5間)であった。また、20世紀初期～中期(大正中期から昭和期)に建てられた2階建ての街屋はサンプル数は少ない(現地調査により10軒の街屋プランを対象とした)が、その敷地間口は平均4.6m(2.6間)であり、敷地奥行は14.2m(7.8間)であった。その後、戦後から現在まで深坑街では建て替えが進む。その場合、敷地を合筆した事例もあるが、全体としては間口方向に顕著な変化は見られず、平均4.5m(2.5間)である。また、奥行の平均値は約30m(16.6間)であった。大正期までの住宅が建て替え対象になっていることを示していた。

旗山鎮と深坑街の両地域における敷地規模の変遷過程を比較すると、それほど大きな差異はないと言ってよいであろう。しかし、現代風街屋敷地においては、旗山鎮の街屋の間口及び奥行とも狭くなる傾向が見られ、一方、深坑街の街屋では奥行方向に拡張する傾向が見られる。

4. 旗山鎮の街屋平面類型

旗山鎮における伝統的街屋は、後の増改築のために建設当初の姿を留めているものはほとんどない。ヒアリングの結果に基づき、現プランを建設当初の形式に復元しその平面構成を類型化する。既報の深坑街屋と同様の類型方法により、街屋住宅において最も重要な空間である店舗と大庁の配置形式に基づいて平面を類型化した。

その結果、旗山鎮の街屋住宅は平屋建ての「店舗・大庁併用型」(22例)と2階建ての「1階店舗・2階大庁分離型」(14例)の2タイプに大別された(表6)。

〔表6〕旗山鎮の街屋平面類型

階数	平 屋 建 て						2 階 建 て						単位: 戸
類型	店舗・大庁併用型						1階店舗・ 2階大庁分離型						
	1階寝室			中2階寝室			1階寝室			中2階寝室			
寝室数	1 室	2 室	計	1 室	2 室	計	1 室	2 室	計	1 室	2 室	計	
清末期～ 大正初期	3		3	10		10			-			-	22
大正中期 ～昭和期			-			-			-		14	14	14
合 計	3	-	3	10		10			-		14	14	38

一方、深坑街の街屋住宅は前稿の通り平屋建ての「店舗・大庁併用型」(18例)、「店舗・大庁分離型」(8例)と、2階建ての「1階店舗・大庁併用型」(2例)、「1階店舗・2階大庁分離型」(10例)の4タイプに類型化された。従って、深坑街に見られた平屋建て「店舗・大庁分離型」と2階建て「1階店舗・大庁併用型」は旗山鎮においては見られないことになる。

旗山鎮及び深坑街において最初期に建てられた街屋住宅は両地域とも平屋建てであり、「店舗・大庁併用型」であった。しかし、両者の違いは店舗と大庁の分離時期、中2階の設置時期及び中庭の有無に見られる。旗山鎮における店舗と大庁の分離は大正中期の赤煉瓦造の2階建てが出現する時期以降である。それ以前の平屋建てタイプは現地調査から全て店舗と大庁を併用したものであることが確認されている。特に旗山鎮は深坑街よりいち早く市区改正が行われ(1903年)、平均16m前後の奥行の浅い敷地(表3、4参照)の均一な街屋敷地に区画された。敷地の奥行が制約されることにより、店舗と大庁を併用せざるを得ず、また、前段階の街屋には見られなかった中2階部分の寝室利用が見られることとなる。

これに対して、深坑街では同時期の街屋敷地では比較的奥行の深い敷地を持つため、「店舗・大庁分離型」が現れた。中2階部分は物置として使用された。

なお、台湾の一般的な街屋住宅では、家屋の台所の横側に、あるいは建物と建物の間に中庭を設けるのが一般的であったのに対して、旗山鎮においては、このような例は少なかった。大正中期以降、2階建ての「1階店舗・2階大庁分離型」が多い点は旗山鎮、深坑街ともに共通している。

図4は旗山鎮における平屋建て「店舗・大庁併用型」(3例)である。道路に接する家屋の手前部分には歩行者の通路空間となる亭仔脚が設けられる。大門(入口)から奥に向かって順に店舗・大庁、寝室、台所が並ぶ。店舗・大庁の屋根裏には室とは呼び難い物置場に過ぎないような狭いスペースがある。

この後の段階として「店舗・大庁併用型」(19例)の中2階寝室タイプが現れることが確認できた(図5)。このようなタイプのほとんどは1901(明治34)年、初代

〔図4〕平屋建て「店舗・大庁併用型」の1寝室タイプ

〔図5〕平屋建て「店舗・大庁併用型」の中2階寝室タイプ

〔図6〕洋風街屋の2階建て「店舗・大庁分離型」

庁長である石橋亨により行われた大規模な市区改正と同時に大量に建設された（奥行き浅い）街屋住宅である。平屋建て（中2階を持つ）の単進型であり、外観の特徴として石積みのアーチ状の亭仔脚を持つ。入口を入ると大庁があり、店舗としても使われる。その奥に台所が続く。浅い敷地と制約されたため、寝室は居室化された中2階に移され、公的空間との分離が行われている。

大正中期に、中山路の道路沿いに、19軒の赤煉瓦造2階建て「1階店舗・2階大庁分離型」（14例）の同一平面（図6）を用いた街屋住宅が建設された。外観では西洋建築のディテールと中国文様をアレンジしたファサードが用いられた。1階は店舗専用空間で、奥に台所、浴室、便所、2階には大庁と8畳の和室2室が設けられている。2階の道路に面する側の和室には床の間がつくられ、日本的趣味の掛け軸や生け花などが飾られている。また、大庁に接する和室には押入れが設けられ、和室と和室の間は襖によって空間を仕切っており、日本建築様式を採り入れている。まさに和漢洋混淆様式である。このような新たな街屋形式は旗山鎮だけでなく、台湾全島にも広がっており、「文明開化」を象徴するものと見なされていた⁷⁾。

5. 旗山街屋の構造とディテール

旗山鎮における最も古い単独式の農家住宅（合院住宅）の構造は柱が直接に梁を支える「穿斗式」と呼ばれる木軸組構造であり、竹による網代組み造の土壁が柱と柱の間に塗り込まれている（図7）。深坑街の原初的街屋住宅にもこのような木軸組構造（穿斗式）が用いられていたことは前稿で述べた。しかし、旗山鎮においては木軸組構造の街屋は全く見当たらず、ほとんどが「硬山擱檁」と呼ばれる壁構造である。既報でも述べたよう

に、「硬山擱檁」とは柱を使わずに干乾し煉瓦、あるいは赤煉瓦の積み重ねのみで造られた壁が構造体となる。そして、壁に対して垂直方向に置かれた梁で中2階、または2階の床及び屋根を支えている（図8、9）。また、梁の下方に赤煉瓦が置かれて梁の荷重を支え、梁の下沈を防ぐ構造となっている。

旗山鎮は竹の生産が豊富であり、梁や垂木に竹がよく使われた。一般に、3尺の間隔で丸太を置き、その間に3～4本の竹が補強的に加えられている。

旗山鎮の街屋における亭仔脚（アーケード）の形式は母屋との関連から以下の3タイプに分けられる。アー

〔図7〕「穿斗式」の木軸組と網代組造の土壁

〔図8〕「硬山擱檁」の壁構造（平屋建て）

〔図9〕「硬山擱檁」の壁構造（2階建て）

〔図10〕一般に認識されている亭仔脚の変遷過程（文献－6の図を筆者が清書し直した）

〔図11〕旗山鎮の亭仔脚と母屋の形状と採光の取込方

ケードと母屋の屋根を切り離す掛け方の「亭仔脚式」、アーケードと母屋の屋根を一体化した「歩廊式」、アーケードの上部が部屋となる「騎楼式」の3タイプである⁸⁾。

「亭仔脚」は地域によって様々な形式があり、それについて論じた研究も多い。亭仔脚の変遷過程に関しては、文献－7によると「初期の亭仔脚では、本棟に増築する形で屋根がかけられていた。（中略）その後、亭仔脚と母屋との雨仕舞いのまずさもあって、屋根は一体で処理されるようになる。（中略）建築技術の発達とともに多重屋根や二層構造の街屋も造られるようになり、人の通行のできる「歩廊式亭仔脚」、歩道の上部に部屋をもつ「騎楼式亭仔脚」が造られる」と認識されている（図10）。しかし、旗山鎮の街屋において確認できる最も古い（日治以前）街屋（中山路北端）の亭仔脚は母屋の屋根と一体であった（図11、左側）。この街屋群の隣には、日治時代初期に建てられた街屋があり、亭仔脚と母屋の屋根を切離した形式が用いられ、母屋中2階の換気・採光のため、亭仔脚の屋根と母屋の屋根の間に段差が作られていることが確認できた（図11、右側）。

また、1901年の日治時代に旧旗山駅の北側、中山路南端に建てられた街屋は、亭仔脚と母屋の屋根を一体化し

たものであった（図12）。これよりやや遅い時期に建てられた現在の復新街西端の街屋は母屋の屋根と分離したかけ方の亭仔脚が用いられている（図13）。近年では、頻繁に増改築が行われ、日治時代初期に建設された亭仔脚と母屋の屋根を一体化した街屋は採光、通風が悪いため亭仔脚と母屋の屋根を分断し、また、元々の中2階部分の天井を增高させて（棟上げして）、完全な2階とする事例が多く見られる（次節参照）。以上の変遷過程に見られるように、亭仔脚と母屋の屋根を一体化することが必ずしも街屋の進化における最終的な形式を示しているとは言えない。また、亭仔脚と母屋の屋根を分離させるのも必ずしも「雨仕舞いのまずさ」から生じたとは言えないように思われる。また、文献－8が実施した現地調査によると、17世紀中期頃、台湾の沿海地域（朴子、大林、新港、北港）において、すでに「亭仔脚式」及「歩廊式」が同時に存在していたことを指摘している。とすると、亭仔脚の形式から街屋の建設時期を判断するのは慎重でなければならないことになる。

次に、街屋住宅のファサードの変容について若干の考察を述べる。

日本においては明治維新以降、欧米列強に伍するべく積極的に欧米の建築様式や技術を採用入れ、洋風建築が

断面図

〔図12〕母屋の屋根と一体化した亭仔脚

〔図13〕母屋の屋根と分離したかけ方の亭仔脚

〔図14〕大正中期以降に現れた洋風街屋の外観

現れた。そして、1895（明治28）年、日本帝国の植民地統治の下に置かれた台湾においても、日本国内で広がった西洋建築の風が次第に流れ始めた。最初、西洋様式は官庁建築に多く現れた。やがて1920年頃から、台湾経済が高揚するにつれ中産階級が現れる。彼らはこのような異色形式に興味を示し、官庁建築を通じて学んだ西洋建築におけるベディメント、コーニス、エンタブレチュアなどの表面的なディテールを模倣して、街屋住宅のファサードに採り入れた⁹⁾。このような西洋建築要素の強いファサードは次第に全島に広がって、大正中期以降～戦前の間に台湾の街屋の主要な顔となった。このような典型的事例の一つは旗山鎮中山路にある一連の赤煉瓦造の街屋である（図6、14）。

また、台湾の伝統的住宅に使われる主要な壁材は干乾し煉瓦（約36×22×10cm）、または手造り赤煉瓦（寸法は規定されていない）であった。しかし、1900年頃に日本から煉瓦を造る新機器の導入によって定められた寸法（23×11×6cm）の煉瓦が大量生産できるようになり、台湾の住宅に革命的な影響をもたらした。最初、この煉瓦は重要建築物にしか用いられなかったが、次第に民間の建物にも普及するようになった。1907～1917年頃に沿海部や大都市において、2階建て赤煉瓦造の街屋住宅が大量に出現した理由である。

なお、山間部に位置する旗山鎮や深坑街では、2階建て赤煉瓦造の街屋住宅は大正中期以降、すなわち沿海部や大都市より少し遅れて現れたことが現地調査により確認できた。

6. 増改築による街屋の変容

前報に示した深坑街屋は茶産業により発展した。茶産業はその製造、販売、運輸面において、大量の労働力を必要としたため、一時に人口の急増が見られた。また、産業の発展に伴い、多くの街屋では「2進型」の増築が行われたことは前稿で指摘した¹⁰⁾。

〔図15〕平屋建て「店舗・大庁併用型」の増改築例

一方、旗山街屋においては、主に市街地周辺の農家及び地域内を対象とする地方商業形態であるため、大量の労働力や大きな商い空間は必要としない。それ故、その後の増改築における要因は主に生活のニーズ、住環境水準の向上及び家族構成の変化によるものであることがヒアリングにより確認できた。また、戦後、旗山鎮の旧中心市街地における都市開発の進行に伴い、道路は次々と拡張された。その拡張された道路幅に従い、街屋の亭仔脚部分もしくは家屋部が切断された景観が所々に見られるようになる。その道路の拡張とともに家屋の増改築が行われる例もしばしば見られる。

以下では増改築の状況を伝える代表的な事例を挙げる。

第3節において、1901年頃に建設された平屋建ての単進型街屋敷地の奥行は平均16m(8.8間)前後であることを示した。この街屋は旗山鎮街屋の一つの典型であるが、奥行が浅くまた宅地の背後に別の宅地が迫っているため、奥への増築が難しく、垂直方向への増改築が行われる。最も一般に用いられた増改築方法は図15のような例である。元来、母屋と亭仔脚の屋根は一体であったが、採光、換気を高めるため、一体であった屋根を切り離して、中2階の天井を棟上げし、完全な2階にする。その2階化した部分は子供の寝室として利用される。また、元々「店舗・大庁併用型」であったが、店舗と大庁を併用した空間の中央部に仕切りを入れ、大庁を後退させた。大庁は居間食堂と表示しているように食堂や居間としても使われている。元の台所は親夫婦の寝室となり、台所及び浴室、便所は防火路にはみ出す形となっている。

〔図16〕平屋建て「店舗・大庁併用型」の増改築例

次の図16の例は前例と同様に平屋建ての単進型「店舗・大庁併用型」であった。後の増築により2階建ての建物が敷地奥行いっぱい建てられる。増築された1階部分は手前から食堂、居間、その奥に2寝室、浴室、便所が設けられている。店舗と大庁は分離され、2階の手前部分に大庁が置かれて、奥には子供の寝室が増築されている。

図17の例は、大正末期に建設された2階建ての単進型「1階店舗・2階大庁分離型」である（図6参照）。後に本棟の裏庭であったところに、2階建ての増築が行われた。増築された1階部分には居間（食堂）、親寝室、便所が設けられ、2階部分には子供寝室及び浴室、便所が設けられている。また、本棟の浴室や便所は潰され、台所が広げられている。本棟の店舗の上部にある元の寝室は予備室となった。家族の生活の中心は増築された部分に移された。以上の2例は敷地奥行に余裕のある場合、「2進型」となる台湾街屋の増築方法として最も典型的例である。そのうちこの図17は第1進、第2進とも2階建ての最も延べ床面積の大きくなる場合である。

図18の前住宅A棟の例は、元々街屋ブロックの中の一軒であり、間口「1間」¹¹⁾、中2階を持つ平屋建ての単進型「店舗・大庁併用型」であったが、道路が広げられたために店舗・大庁の半分まで切り取られた。残された部分は店舗・大庁と中2階の半分及び台所の部分だけであった。本来なら図15のような増改築となるはずが、あまりにも奥行がないため、横の2軒（同じ半分が切り取られた街屋である）を合併して現在のプランとなった。その結果、元々A棟にあった大庁が分離され、横のB棟の手前部分に移され、A棟の元の台所が母親の寝室に改築された。B棟の大庁の奥の元の台所部分が母親の浴室便所となった。C棟の手前部分は子供夫婦と孫の寝室となり、その奥に台所及び浴室、便所が設けられている。中2階部分は物置として使われている。このようにして

最低限度の住空間が確保された。その結果、部屋は道路に面することになる。従って、元々の細長い平面プランから街屋として珍しい間口の広いプランとなった。

また、元来、旗山鎮の中心市街地の周辺には多くの合院式の農家住宅が分布していたが、都市化されていく過程で道路沿いの農家住宅が店舗に改築され、街屋化されていく例が見られる。図19は調査した6例の中で典型的な例の一つである。「五起間雙伸手¹²⁾」と呼ばれる三合院の農家住宅平面プランを持ちながら、道路沿いに面する部分だけが店舗専用空間に増改築されている。増改築当初、貸し店舗として建てられた街屋部分は「店舗・大庁併用型」の形式が用いられ、A棟とD棟が2寝室タイプであり、B棟とC棟が1寝室タイプであった。台所は全て寝室の奥に置かれており、店舗・大庁の上部の屋根裏に物置のスペースが設けられている。

持ち主の家族は元々三合院部分だけを使用していた。中庭に面して大庁の左側が親夫婦の寝室であり、右側が長男夫婦の寝室である。また、大庁の前方に中庭を挟んで左側が次男夫婦、右側が三男夫婦の寝室となった。大家族の共用台所は親寝室の横側に置かれていた。

しかし、現在では長男だけが三合院に住み、次男及び三男は街屋のA、B棟に移っており、子供世代は全て別居である。台湾における都市周辺部農家住宅の変容過程とその住まい方を示す典型的な例と言えよう。

以上、主に物的、空間的側面から旗山鎮における街屋住宅の増改築の傾向を述べてきたが、以下ではそこに共通している使われ方、あるいは設備についての傾向をまとめると以下ようになる。

① 大庁における機能の分散

元々街屋住宅の大庁は居間のような空間であり、食事、家族団欒の場に加えて接客、祭祀空間としても使用される。前報の調査において、深坑街における「店舗・大庁併用型」街屋の多くは、後の増改築により大庁の空

〔図18〕平屋建て「店舗・大庁併用型」の増改築例

〔図17〕2階建て「店舗・大庁分離型」の増改築例

〔図19〕三合院農家住宅の前面に街屋を増築した例

間及び機能が完全に店舗から独立することを明らかにした。それに対して、旗山鎮の「店舗・大庁併用型」街屋は食事、家族団欒、接客などの機能だけを分離させて食堂（居間）に移し、祭祀（神様）機能は店舗空間に残している。このように大庁の機能が完全に分離されない理由として、住空間が狭く専用空間が取れない場合と、神様を店舗に置くことで商売繁盛を守る意味から店舗に置かれる場合のあることがヒアリングにより確認できた。

② 中2階の2階化

平屋建て「店舗・大庁併用型」のうち中2階タイプとして建てられた街屋は、今回の調査で約7割（13/19）近くが完全2階に改築されている。

③ 子供寝室の増加

建設当初の平屋建て街屋は全て1寝室であったが、経済（生活）水準の向上に伴い、寝室とりわけ子供寝室が増加している。

④ 水廻り空間の屋内化

旗山鎮においては、大正中期までは街屋の便所は屋外の汲み取り式であった。しかし、その後大正末期に建てられた2階建て赤煉瓦造街屋ではすでに屋内（汲み取り式便所）になっていた。戦後、水洗トイレや浴槽が普及し、ほとんどの街屋はこれら衛生設備を備えるようになった。

以上が旗山鎮における増改築の主な傾向である。深坑街

における街屋の増改築と比較すると上述のうち①、②が旗山鎮に特徴的である。

7. 現代風の街屋住宅

文献一9によると、台湾において最も人気にある住宅は次のようである。

「透天式」の一戸建て住宅（または二戸一住宅）が最も多く38.9%を占めている。続いて、「透天式の連棟式住宅」（隣家と公壁をもち、連続に建てられた形式）の25.2%、5階建てのアパート住宅の23.1%、6階建て以上のマンション住宅の5.6%である。すなわち、地面から天に届くまで全て私有空間である「透天式」の一戸建て、連棟式住宅が6割以上の人気を集めている。

第2次現地調査において、旧市街地及びその周辺に最近10年以内に建て替えられた街屋及び新築街屋を対象とし、90軒の街屋プランを採集することができた。その結果は、上述の指摘を再確認するものとなった。すなわち、最近10年以内に建てられた旗山鎮の現代風街屋は、その店舗と大庁の配置からみて透天式の「店舗・大庁併用型」（2軒、2.2%）に属するものが僅かに見られるが、ほぼ全てが透天式の「店舗・大庁分離型」（88軒、97.8%）である。建物階数別に階数別の居住室パターンを集計したものが表7である。それをみると、透天式の「店舗・大庁分離型」が圧倒的に多く、また、その中で5階建て4寝室タイプが最も多く70%（63軒）を占めている。ついで、同型の4階建て3寝室タイプとなる。つまり、19世紀のロンドンで盛んであったテラスハウス（タウンハウス）のような1階から最上階まで同一家族が使用する形式が圧倒的に多いのである。

透天式の「店舗・大庁分離型」の街屋においては、1階には店舗が置かれ、大庁はほとんど最上階に移されている。ヒアリングによると、積層式となった街屋において先祖や神様を祭祀する空間の上部に部屋が置かれるのは流神となるから、とのことである。また、最上階は通風、採光の確保できる場所であるため、聖的空間に最もふさわしいと認識されている。

〔表7〕旗山鎮の現代風街屋（透天式）の寝室数別に階数別の居住室パターン

	居室	住 室					戸数	比率%
		1階	2階	3階	4階	5階		
店大併 用型	2寝室	店, 庁, 臥, 臥	臥, 臥, 臥, 臥				1	1.1
	3寝室	店, 庁, 臥, 臥, 臥					1	1.1
店 分 離 型	2寝室	店, 臥, 臥	臥, 臥, 臥, 臥	庁, 臥, 臥, 臥			3	3.3
	3寝室	店, 臥, 臥, 臥	臥, 臥, 臥, 臥	庁, 臥, 臥, 臥			1	1.1
	4寝室	店, 臥, 臥, 臥, 臥	臥, 臥, 臥, 臥	庁, 臥, 臥, 臥			10	11.1
	5寝室	店, 臥, 臥, 臥, 臥, 臥	臥, 臥, 臥, 臥	庁, 臥, 臥, 臥			3	3.3
	6寝室	店, 臥, 臥, 臥, 臥, 臥, 臥	臥, 臥, 臥, 臥	庁, 臥, 臥, 臥			2	2.2
	7寝室	店, 臥, 臥, 臥, 臥, 臥, 臥, 臥	臥, 臥, 臥, 臥	庁, 臥, 臥, 臥			1	1.1
合 計	6寝室	店, 臥, 臥, 臥, 臥, 臥, 臥, 臥	臥, 臥, 臥, 臥	庁, 臥, 臥, 臥			63	70.0
	7寝室	店, 臥, 臥, 臥, 臥, 臥, 臥, 臥	臥, 臥, 臥, 臥	庁, 臥, 臥, 臥			2	2.2
							90	100.0

[図20] 現代風街屋（透天式）「店舗・大庁分離型」

[表8] 旗山鎮の伝統的街屋の寝室数別階室数別の居住室パターン

居 住 室 パ タ ー ン				
寝室数	1 階	2 階	戸数	比率%
店 併 ・ 用 大 庁 型	0 寝室	店, DK	2	5.6
	1 寝室	店, 寝, DK	1	2.8
	2 寝室	店, 2 寝, DK	2	5.6
		店, 店, 2 寝, K	2	5.6
		店, 店, DK	1	2.8
		店, 店, 寝, LD, K	2	5.6
	3 寝室	店, 店, DK	6	16.7
		店, 店, 2 寝, K	1	2.8
		店, 店, 2 寝, K	3	8.3
	4 寝室	店, 店, K	2	5.6
店 分 ・ 離 大 庁 型	2 寝室	店, 寝, DK	2	5.6
	3 寝室	店, DK	1	2.8
	4 寝室	店, 店, DK	1	2.8
		店, 2 寝, DK	5	13.9
	5 寝室	店, 2 寝, K	2	5.6
合 計		店, 寝, DK	3	8.3
			36	100

2階は主にL、DKが設けられている。2階以上の階と最上階の間は寝室が配置されている（図20）。

一方、伝統的街屋における現在の使用状況の寝室数別階室数別の居住室パターンを集計したのは表8である。伝統的街屋は現在ほとんど（31/36）2階に増改築されていることが分かる。しかし、その中の「店舗・大庁併用型」街屋では、1階は現在も店舗空間、格式空間（大庁）、生活空間（DK、寝室）などが混在し、2階は全て寝室空間となっている。住空間が狭く、機能分化ができない状況を示している。「店舗・大庁分離型」街屋では、1階は主に店舗とDKである公的空間が置かれており、その奥に寝室が増加されている。2階には大庁と寝室が設けられ、私的空間として整理されている。室数の戸数分布からも分かるように、店舗・大庁併用型の平均寝室数は2.1室、これに対して分離型は3.8室でほぼ倍近くも寝室数が違っており、それ故に機能の分化、整理の進んでいることを示している。

以上のように旗山鎮の現代風街屋においては、亭仔脚を持ち、公壁を共有する街屋形式が依然として用いられている。都市化する程、土地を高度利用しなければならず、それ故深坑郷においては高層の「大厦・店舗住宅」が現れていたが、旗山鎮では「透天式店舗併用住宅」が主流であり、高層の大厦式は見られない。それだけ、深坑郷は旗山鎮より都市化現象の著しかったことを示している。とはいえ、旗山鎮における現代風街屋の敷地面積

は平均59.2㎡である。最も古い延平路南端の伝統的街屋の敷地面積の158.1㎡に比べて、約100㎡小さくなった。その結果、垂直方向に高層化し、5階建ての透天式店舗併用住宅となっているのである。

8. まとめ

本研究では台湾南部の山間部に位置する高雄旗山鎮における街屋住宅の変遷過程を、同じ閩南系であり、台湾北部に位置し、かつ山間部の町である深坑郷の街屋との比較の中で明らかにすることを目的として考察を進めてきた。その主な結果を要約すると以下のようになる。

1) 旗山鎮の建設当初の街屋は平屋建て単進型の街屋が多く、その平面構成は「店舗・大庁併用型」が主流である。この点は深坑郷も同様である。

2) 旗山鎮においては既に1900年代頃に建てられた街屋において、2階を居室化し公的空間との分離が行われていた。

3) 亭仔脚の変遷過程及び母屋屋根との関連については、原初的には母屋と分離した掛け方から母屋と一体化していく過程であると一般に認識されてきたが、旗山鎮における現地調査においては、その逆の結果が見られる。すなわち、旗山鎮においては早い時期から中2階の居室化が始まるが、一方採光、通風のため、中2階の天井を高めて（すなわち棟上げすることにより）、亭仔脚と母屋の屋根を分離していく経過が見られる。

4) 1917年頃以降の経済の好調につれ、中産階級が勃興してくる状況を背景として、日本から導入された洋風建築と伝統様式をアレンジした2階建て赤煉瓦造の街屋が現れる。

5) その後、増改築により住空間の質的、量的拡充が図られる。増改築は一般的には敷地奥行方向への2進化によって行われるが、敷地に余裕のない場合は2階化のみにより行われる。いずれの場合もほとんどの住宅において2階化が進行している。

6) 増改築により①大庁機能の分散、②中2階の完全2階化、③寝室とりわけ子供寝室の増加、④水廻り空間の屋内化、などの平面構成上の変容が顕著に現れてくる。

7) 伝統的街屋における大庁機能の分化はその住宅規模と大きく関係している。

8) 近年の旗山鎮における新築（建て替えも含む）街屋住宅は中層化しており、5階建ての透天式店舗併用住宅が主流となってきている。しかし、深坑郷に見られた高層の「大厦」式は見られない。そこに象徴的に表れているように、以上の結論は山間部にあって、しかし、深坑郷ほどには都市化していない発展過程にある郷町の一つの住宅状況を示していたことになる。

注：

- 1 文献-10
- 2 文献-1
- 3 文献-2
- 4 文献-1
- 5 植民地政府（蕃務寮庁）の計画に基づいて、民間が独自に建設した街屋である。
- 6 文献-3により、1936年に公布された「台湾都市計画を実施された都市一覧表」には、旗山郡は記載されていないが、文献-4では、「日治時代の明治34年に蕃務寮庁が設置され、初代の庁長である石橋享氏は大規模な市区改正を行い、今日の旗山鎮の基本となる都市計画であった」と記載されている。
- 7 文献-5
- 8 アーケードの形式は文献-6により3つのタイプに分けられるが、一般にはどちらも亭仔腳、あるいは騎樓と呼ぶ。
- 9 文献-5
- 10 2進型とは中国の建物の規模を測る単位である。道路に面する入口側から奥方向へ「建物+中庭+建物」というような平面構成を指している。しかし、旗山街屋の場合では中庭が備えていなく、または潰されたことが多い。
- 11 前稿に述べたように、「間」とは台湾の建物の間口を測る単位であり、柱と柱の間を指すが寸法は規定されていない。

- 12 「五起間雙伸手」とはコ字型のような三合院住宅形式を指している。5つの「間」（五起間）の端の前方に2列の建物を伸ばされているような形態である

参考文献：

- 1 旗山郡役所：「旗山郡勢要覧」1941年
- 2 張漢裕、他：「台湾在日据初期（1895～1906年）之植民地發展政策－官僚資本家企業之一例」台湾文献16巻3期 1968年
- 3 青島勝三：「都市計画の概況及び一般調査」台湾都市計画講習録 1937年
- 4 旗山鎮公所：『旗山鎮沿革』1992年
- 5 李乾朗：「台湾近代建築史」雄獅圖書股份有限公司 1980年
- 6 閔華山：「談台湾伝統街屋二題」台湾建築師雜誌 1979年12月
- 7 茂木計一郎：「騎樓型民居の構成に関する研究（梗概）」住宅総合研究財団、1991年
- 8 黃羅財：「台湾伝統長形連棟式店舖住宅の研究」台湾東海大学修論 1983年
- 9 台湾行政院主計処：「中華民國77年台湾地区住宅状況調査報告」1988年
- 10 磊志高、玉置伸悟：「台北県深坑郷の街屋住宅平面プランについて－台湾における山間地域の街屋に関する研究、その1」日本建築学会計画系論文集第481号 1996年3月

(1995年11月9日原稿受理、1996年3月6日採用決定)